慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	江戸・明治期における小語彙集つき書簡作法書・その2
Sub Title	Handbook of letters with small vocabularies in Edo, Meiji era (2)
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.54 (2023. 3) ,p.97- 124
JaLC DOI	10.14991/005.00000054-0097
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000054-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

江戸・明治期における小語彙集つき書簡作法書・その２

関　場　　武

はじめに

２年前の本紀要51号の拙稿では、冒頭に「文林節用筆海往来」「書札節用要字海」それに「孝経童子訓」を取上げ、江戸期の往来物と辞書・字典との密な関係の一端を記したが、論考の流れで書名のみの紹介に終わり次号廻しにしたものもある。その中の宝暦７（1757）年初刊「書札節用文章」については、今手許には明和２（1765）年正月の求板本しかなく、また、前付に「今所編の節用ハ、遠きを省き近を集め、所謂於文章ハ通用之文字ことごとく加之、庶幾ハ、用を鈌事なからしむ、豈往々有来る所の節用集に可比哉、是千金の寶也」と言う浪華・以佐立悦作、享保18（1733）年丑3月吉日、武江書林萬屋清兵衛・西村源六刊の「文花節用書状袋」は粗本しか持ち合わせ無いので、小泉吉永氏の「往来物解題辞典」(2001年3月大空社)（以後「小泉」と略称ス）に委ねることにし、以下の２点についての紹介から始めることとする。資料の始めにある番号は、前稿に続くものである。前稿で紹介したような小語彙集付き書簡作法書の類は、汗牛充棟、非常に数が多く、その全てを紹介すること等とても無理な相談である。したがって今回も恣意的な選択による報告となる。項目数については数え違いもあり得るので、概数として見て頂ければ幸甚である。また、資料掲載に当たっては、フリカナの多くを割愛し、適宜句読点を施したほか、異体字は通行のものに改め、踊り字・合字を開く等の措置をしてある。

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 54 号（2023）pp.97-124

Ⅰ

26）．文寶用文字盡大成

濃縹色地紙表紙、大本1冊。題簽欠。

封面：龍・雲の模様入り飾り枠。中央に大きく「文寶用文字盡大成」の書名、右に「皇都書肆今村氏」、左に「奈壽軒梓」（朱印記2個）。

柱刻：白口、「明和新刻用文章　（丁付）」。丁数：前付：17丁、本文：廿ノ卅、卅五・四十、四十五ノ五十、五十六ノ六十、六十五・七十、七十六ノ九十、九十四ノ百、百三ノ十、百十六ノ三十、百三十六七といった具合に飛び丁が多く、数え難いが、64丁。合計81丁。

前付14丁目ウに〔序〕（皇京・臥山子文坡編）、15オ～17ウに「文宝用文字盡大成目録」アリ。

刊記：終丁オ頭書「士農工商」、下段「京町盡」「片かな」の次に界線を置き、左に「筆者　平安・芦田鈍永、畫圖　洛西・下河邊拾水／彫刻　山本長左衞門、中川金治／明和五年戊子正月吉旦　書林本問屋　京都松原通西洞院・美濃屋平兵衞板行」とある。

【内容】前付は王義之像、〔瀟湘八景図〕、「書厨正圖（小野道風朝臣の家の書厨の圖也とアリ）」の見開き図が3種。「萬積方之繪圖」、「京ヨリ大坂江河上道中記」「「本朝能書之三跡之圖」「萬手形諸證文之案紙」「琴碁書画之圖」「書状用捨教訓鑑」など21種があり、目録によると「新春に田舎へ遣す祝儀状」、「同新年祝儀文返答状」、「入学したる子を賀する状」～「寒氣見舞ニ遣す状」、「歳暮祝儀申つかハす状」、「月迫見舞につかハす状」までの64通の書状例を収める。但し例示されているその書状は一通毎の区切りが判然とせず、参照するのに大いに不便である。また、後付は「元禄御改服忌令」、「九九之次第」「八算掛割之術」「本朝年号用字」「暦之中下段之叉」「草木植替時之叉」「五性相性書判」「色紙短冊書様」「本朝年代略記（明和元・朝鮮人来マデ）」「大日本圖」「京町盡」など21種を収載する。

頭書「節用四季部分字盡」は、正月之部、二月之部から始って十二月之部に至る関連語彙をまとめたもので、合計882項。正月之部が129と一番多く、

十一月が36と一番少ない。末に「四季言寄字尽終」とあって、次の「諸用部分字盡」Aに続く。これは「神祇之部」「釋教之部」「戀之部」「述懐之部」「哀傷之部」「羇旅之部」の6部から成るが、次にまた「諸用部分字盡」Bと題して下記の如く「消息之部」「羇旅之部」「酒宴之部」「＜増補＞消息之部」「市店之部」の5部を立てる。項目数は以下の通りである。

【諸用部分字盡】A

神祇113、釋教122、戀86、述懐61、哀傷40、羇旅87　（計509項）

【諸用部分字盡】B

消息76、羈旅34、酒宴53、＜増補＞消息280、市店61

（計504項）

羇旅が2度立てられ、消息之部が2つに分かれ増補の部分の方が多いのが目を惹く。また、酒宴、市店之部を立てるのも特徴的である。諸用A釋教の「和尚貞」、戀の「中言云」、「築地之崩」、「腕引」、「錦字詩」、羈旅の「行程記」、「邪々踏」、「朶々言」、諸用Bの酒宴「悪々三盃」、「滝飲」、「青上戸」、市店之部「虚喧咾」などは、通常の書簡の用語としては珍しい。

本書に於ける語彙集的なものには、この他、前付の「百官名づくし」「篇冠搆字盡」、後付の「本朝年号用字」「小野篁歌字盡（「はる椿」に始る寛文13年本系120行）「大日本國盡」「人の名づくし」「十二月異名」「片かなイロハ」がある。

注目すべきは柱刻に「明和新刻用文章」とあることで、前版の存在も想定される。往来物の書名に年号を被せたものとしては、「寛政用文章」「享和用文章」「文化用文章」「＜御家＞天保用文章」「嘉永用文章」「明治用文章」等がある。それらについては「小泉」の当該項目を参照されたい。(註1)

27）．＜書札大宝＞文海用文萬字宝鑑（外）

前出の「文寶用文字盡大成」の増補改訂版。「節用四季部分字盡」「諸用部分字盡」等は26と全く同じ。柱刻「明和」の個所を「天明」と改刻。臥仙子の序は同じ。表紙浅縹色、題簽黄茶色。脇題簽あれど磨滅甚だしく判読不能。封面に「文海萬字寶鑑」と題し目録がある。それによれば「世尊寺行能の

圖」「洛東の圖」「日本の圖」「手習讀書の圖」～「士農工商の圖」「年代記」「奉公人請状」等60項を収載。前付の「本朝年代略記」は天明三：浅間焼マデ。新たに「諸品数量字盡」「周禮分六書」等が加わる。刊記は後ろ見返し菅原道真の事蹟と北野天満宮の由来を記した一文の後に「文化元（1804）年甲子二月求板　岩﨑卯之三郎藏／＜皇都書林＞／吉田四郎右衞門、吉田屋新兵衞、吉田屋佐兵衞」とある。「小泉」では、柱題を採り天明頃刊「天明新刻用文章」として不完全本を立項している。

丁付十五オから始まる「文海用文字盡大成目録」は、「百四十八　月迫見舞につかハす状」までは26と同じだが、そこで終わらず、「百四十九　加増を得し人を賀する状、百五十　立身出世の人を賀する状」～「二百十四　道具借用之状」、「二百廿　悔状」、「二百廿四　役替加増之状、二百廿五　人引付之添状、二百廿七　配符之文章」と続き、59通を追加する。そして「頭書」として今川、腰越、義経含状、弁慶状、熊谷送状、手習教訓書の6種の往来物を挙げ、末に「文章目録終」とある。

本書に於ける語彙集的なものには、「節用四季部分字盡」「諸用部分字盡」のほか、天明版では「薬種字づくし」「學者巵言盡」「文房名物」「魚類」「鳥類」が追加されている。「學者巵言盡」は、やさしい言葉を気取って白話風、漢語風にのたまう学者先生の言葉遣いを、多少揶揄の気持を籠めて取上げた部類。足下：そなたといふ事、不佞：われらといふ事、僕：われらといふ事・又家来の事～阿堵物：ぜにをいふ、嚢金：かねの事、貴价：おんつかひ」までの90語で、部類として立ててあるのは珍しい。

因みに、文化・文政頃、名古屋・江戸出店の永樂屋東四郎刊「永樂庭訓往来」55ウ～60ウ頭書には、「學者平話之詞」があり、「今どきの学者は、つねにむつかしき言葉をもつてあつかふゆゑに、たまさかに学者に出あひて物かたりなど聞に、つねにきゝなれぬことばおほけれバ、合點ゆかぬことおほし、今こゝに其あらましをしるして、易くまじハりて物語するあらましの文字を挙る、是を階梯として学ぶべし」として、「足下、不佞、僕」以下、「筆架・ふでかけ、筆池・ふですゝぎ、陶泓・すゝりのこと」までの113語を挙げている。出だしは天明版の「學者巵言」と同じ、末は天明版の文房名物

を取り込んでいる様子が窺える。「文房名物」は、書斉（しょさい）：がくもんじよ～経撓（けいきやう）：しきし、角筆（つのふで）のるい」までの108項。

Ⅱ

28）早見書状大全

玄泉堂戸田栄治書、大型の横本1冊。寛政7年、同12年、文化2年版等のある「＜通達仕用＞書状大全」(註2) が元本である。今手許にある文政3、4年版によれば、封面は青刷り、飾り枠内、中央に大きく「早見／書状／大全」の書名、右に「戸田玄泉堂筆」。凡例「＜通達仕用＞書状大全」、ウに四季の部、祝儀の部、商人（あきうど）要用之部、混雑の部の4部の内容を説明。「混雑の部」は、「遊参、翫水、見廻、かし借、其外四季、祝儀等ニかゝはらざる文通并ニ臨時之用要文章を出す」とある。「増補書状大全」とある目録によれば、四季24、祝儀30、商人は20、混雑は29、合わせて103通の書状見本を、草書体太字振りかな付きで掲載する。

柱刻は白口、各丁ウ下方に丁付。丁付百十一ウ末に玄泉堂戸田栄治の署名と印記、丁付百十二オに「十二ケ月異名之事」、ウに「五節句異名之事」と、「文政三年庚辰十一月再刻／浪華書林／阿波座讃岐屋町・檜皮屋友七、心齋橋南四丁目・吉文字屋市右エ門　合梓」の刊記がある。

次いでオに「助字之譯解」があり、ウに巻末「入用字引集」の目録「いろは分文章字盡大成／部分目録」がある。部分けは雑々門、道具衣服門、艸木食物薬種門、魚鳥門の4部、行草体で、その門ごとにイロハ順に項目を配列する。稀に掲出事項の左に「とうかん等閑・なをざり」、「たんぼ旦暮・あけくれ」、「せうに小児・こども」等と別訓を附したり、項目の下に「ぬるし温・ゆなどにいふ」と説明を付けていたりするが、各項目についてすべて意味説明があるわけでは無い。また、目録で「雑々門」本文に「入用門」とある部類は、「此門にハ書状文句ニ扱ふ文字、官名・人の名、病の名、四季の言葉、其外人の常に入用の文字、皆々爰に集む、但シ道具・衣服・遠き字ハ別に門あり」と説明する。要するに何でもアリということで「雑々門」と称したのであろう。

注目すべきは、目録の末に「〇人の親子兄弟類を敬ひ称へる字盡、又我父母兄弟の類を卑下していふ字づくし」と言い、「字盡本文の中に「すむ」：かやうに印ある所の分ハ、聲のすむことばの類也、たとへバ。祝(いわひ)。勇(いさむ)。又「にごる」：此分ハよみ聲のにごることばなり、たとへバ。童子(どうじ)。如何(いかが)。などのるい也、余ハ是に准べし」という点である。

前者は、書簡礼法上、大事な点であるので、「人の父を称ずるハ」「我母をいふニハ」「我娘をいふニハ」等として例示するのは当然至極であるが、後者「すむ」「にごる」の区分けについての説明は注意を要する。すなわち雑々門を見ると、たしかに「すむ（＝清む）」に属する語彙を前に出し、「にごる（＝濁る）」に相当する語彙を後に掲出している。これは本書の版元・吉文字屋鳥飼市左衛門が、その刊行物の巻末に於いてこの時期、異常と言えるほど力を籠めて内容案内付きの宣伝を展開していた「急用間合即座引」「大成正字通」の検索法式に通ずるからである。（ただ急用・大成の2書は「すむ」「にごる」の他に「ひく」「はねる」を導入したために、大宣伝にもかかわらず却って煩雑に成り普及しなかった。今日でもそうであるが、辞書字典の検索は工夫を凝らしたと言う「漢ぺき君」(註3)ではなく、引き慣れた単純なもののほうが当然利用頻度が高くなるのである）。

手許の一本は、文政3年の刊記の後に「入用字引集」を25丁入れ、後ろ見返しに「當世料理筌」、「文會節用家寶藏」、「筆道稽古早學問」の3書の内容案内付き広告を出し、その左に「文政四年辛巳十一月再板、書林、大阪心齋橋南四丁目・吉文字屋市右衛門」としている。文政4年再版本のために用意されたものが、ここに入り込んでいるだけなのか、再版の際、前版の刊記はそのまま残すという仕立て方をしたということなのかは未詳である。

29）＜御家＞諸國書状指

（A）文化9年7月求版　同10年5月再刻本　小本ヨコ1冊

濃縹色表紙。封面：飾り枠内、「諸國／書状／指＜崇文堂／雙鶴堂＞（朱印・崇文堂印）、「同志梓」。「凡例」に続き目録があり、年始披露状～後妻ヲ迎らる方へ遣文、同返事までの113通の書状を挙げる。明治ものに通じる香

之會催文、誹諧催之文、活花會之文といった風雅なものも僅かに混じるが、世上を反映した疱瘡見舞状、籾無心之文、年貢取立之文、同返書といった切実なものもある。

また、追加として諸證文之文言数々、十二ヶ月之異名、時候之差別、苗字ヲ不書事、連名之順逆、様之字書様、闕字之事、假名ふみ、諸商賣平生取扱字尽の附録記事10を立てる。女筆風仮名文の末に「江都・重田一九撰集、御家御末流橘正敬書之（花押）」とある。「小泉」は重田一九（＝十返舎一九）作とするは仮託であると言う。

後ろ見返し刊記の前に「雙鶴堂藏版書目　田所町・鶴屋金助板」があり、「草書法要一名早引草字彙」以下46点の広告がある。広告中「＜字函集成＞増補節用早指南大全」横切大冊・文字訂正、全部一冊のそれは「世にあまたある節用集にもらしたる文字をあまねく拾集めて増補するのみならず、連哥俳諧、日用文通、俗談平話の文字に至るまで、労せずして得易からしむ、かるがゆゑに世上流布の節用集、おのおのけおされて、此書にまさることあたハず、仍て今おこなハるゝ事夥し、節用集をもとめんと思ひ給ハゞ、こゝろみにこれを得て簡便なることをしり給へ、実に海内至宝と可謂書なり」と過激である。四方赤良、元木網、一九、馬琴、京傳、三馬らの著作を多く載せる。

刊記は十干十二支の後に界線を置き、左に「寛政九歳丁巳孟春新鐫、文化九年壬申初秋求版／文化十年癸酉仲夏再刻」と年記を出し、＜江戸書林＞日本橋中通・前川六左衞門、田所町新道・鶴屋金助＜仝版＞」とある。柱刻は白口、下部に丁付のみ。6＋144＋34＋3＋奥。

「諸商賣平生取扱文字（しよしやうばいへいぜいとりあつかふもんじ）」はイロハ順、一体（いつたい）. 一槩（いちがい）～瑞相（ずいそう）. 推参（すいさん）までを有界10行28丁と6行に載せ、已上終とする。時にカタカナ左訓、双註のかたちで意味説明、関連語の掲示がある。次いで「苗字大槩并百官平名」が石上（いそのかみ）、五十栖（いそずみ）～住江（すみえ）、末吉（すへよし）とイロハ順にあり、また「附平人之名槩」として源平藤橘、伊織. 数馬以下太郎、次郎、太夫までを掲載する。刷りは良い。

（B）同文化10年仲夏再刻本

半紙半切、表紙：濃縹色地紙。題簽：左肩、「＜御家＞諸國書状指　全」、「全」の右横に＜再版＞とある。封面：飾り枠内に「諸國／書状／指＜僊鶴堂／榮林堂＞印記（同志梓）」。書型はAより大きいが、余白を大きく取っただけで、版面はAと同一。

刊記は「＜江戸書林＞日本橋中通・前川六左衞門、横山町・岩戸屋喜三郎、通油町・鶴屋喜右衞門、人形町・鶴屋金助」とある。出版経緯のうち寛政九歳と文化九年云々はAと同じだが、「文化十年癸酉仲夏再刻」の条の「文化」の2文字が無い。刷りはAより劣る。

刊記の前に「書林飯島雙鶴堂藏板書目」が3丁あり25点の書目を載せる。また続いて「江戸人形町通乗物町・鶴屋金助」の広告があり25点が載る。本書については鶴屋のそれに「御家末流橘政敬筆　横本一冊　世に用文あまたありといへども、他にまさりて文言をあまた集め、遠國掛合注文其外、入くみたる用事をも即座に便じ、猶末に手形證文ことごとくのせたり」、「全　大全、右同一冊　右にもれたる文を増補し、又末に節用字引の大略を記して、用文・字引兼備の書とす」とある。Aにも見られたが、江戸時代の出版書肆の刊行・販売目録は、自家のものの優位性を謳うものが多く、節用集をはじめとする辞書字典類は、当然のことながら、後発のものが前のものより勝れていることを声高に主張している。

（C）文化10年再刻　嘉永2年求板本

中本ヨコ1冊　表紙：濃緑色地紙に紗綾形模様空押し。題簽：左肩、「＜御家＞諸國書状指全　再版」

封面：巻物表紙様式、中央に大きく「書状／指」の題名、左に「東都書林　玉山堂梓」と版元名。丁付百四十四ウまで本文。末に「御家御末流／橘正敬書之（花押）」とあり、A、Bに在った「江都・重田一九撰集」の表示は無い。

刊記：後ろ見返し。十干十二支の後、界線を置いて左に「文化十年癸酉仲夏再刻、嘉永二年酉十月求板／＜江戸書林板元＞／神田三嶋町・梅澤勘平、市ケ谷御門外・奎文閣河内屋石井佐太郎、日本橋通二町目・山城屋佐兵衛」と

あり。
＊仮名遣い、字体の相違等があり、B文化10年版とは別版である。巻末の字集「諸商賣平生取扱之文字」アリ。

（D）同嘉永2年求板、版元異本
表紙：縹色布目地紙。題簽：Cに同じ。封面左の版元名が「東都書林　青雲堂梓」とある。「青雲」は明らかに後の入木である。刊記も書肆名が異なり、「＜東都書林＞日本橋通二丁目・山城屋佐兵衛、南傳馬町一丁目・山城屋政吉、下谷御成道・英文藏板」とある。「山城」の二字は後の入木である。青雲堂は英文藏の堂号。刷りはCより劣る。

Ⅲ

江戸後期の啓蒙書には独習、独稽古、早学び、早学問、早指南、早合点、独案内、自在などと題し速習を謳うものが多い。明治に入ってもそれは続き、諸種の学習書、案内書が出て行く。まず「独稽古」を謳う一連のものから紹介を始めたい。

30）香川一秀・＜國民必携＞作文獨稽古
（A）中本　活版1冊。表紙：香色布目地紙。題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜國民必携＞作文獨稽古　香川一秀著述　全」。封面：薄緑色地紙。飾り枠をタテに3ツ切。中央に書名を大きく出し、右に「香川一秀著述　＜増訂新版＞」、左に「＜鼇頭作文熟語／いろは引＞積善舘＜版權所有之証＞」。
目録：＜初學必携＞作文獨稽古目録」。年始ノ文、梅花ヲ贈ル文、餘寒見舞ノ文、花見誘引ノ文～英語講習會ノ設立ヲ謀ル文、同返書、作文書ノ購讀ヲ勸ル文、同返書（又返書）の174通を掲載。四季折々の書状もあるが、誂物催促ノ文、同復書、徴兵撿査期日ヲ遠國ノ友人ニ報ス、入營中朋友ノ逃亡ヲ其家ニ報ス、其二、同返事、解雇人ヲ吹聽スル文、生糸ノ出荷ヲ促ス書など、世情を反映する文も多くある。本文10行、7＋76頁。
内題：＜初學必携＞作文獨稽古／香川一秀著作」、頭書＜いろは引＞作文

類語」。尾題は題名に「終」の一字を付す。柱刻：上部に「作文類語」のイロハ分け指標、魚尾の下に「作文獨稽古（ノンブル）積善舘藏版」。
刊記：明治二十三年八月二十五日印刷、明治二十三年八月三十一日出版／＜版權所有＞著作者　大阪市東區安土町四丁目三拾八番屋敷寄留・香川一秀、發行者　大阪市東區安土町四丁目三拾八番屋敷・石田忠兵衛、印刷者　大阪市南區末吉橋通四丁目四拾三番地・山口恒七、專賣所　大阪市東區安土町四丁目拾壹番地・積善館、專賣所　福岡縣福岡市博多中嶋町・積善館支店」。
頭書は「＜いろは引＞作文類語」。「伊」祝　自他トモ　嘉祝（カシユク）ヨロコビ・イハヒ、嘉儀（カギ）ヨロコビノギシキ、祝壽（シユクジユ）イハヒコトブク…と、関係する類語・類例を載せる。そして末に「通用助字」として徒（イタズラニ）ト、爭（イカデカ）サウ、否（イナヤ）ヒ等を挙げ、「＜いろは引＞作文類語終」と止める。

（B）同明治25年12月八版
表紙：縹色無地紙。その他（A）に同じ。
刊記に「明治二十三年八月廿五日印刷、明治二十五年十二月廿八日八版／＜版權所有＞／著作者　大阪市東區安土町四丁目卅八番屋敷・香川一秀、發行兼印刷者　大阪市東區安土町四丁目十一番地・鈴木常松、專賣所　大阪市東區安土町四丁目・積善館、福岡市博多中島町・積善館支店、東京市日本橋區横山町一丁目・出雲寺商店」とある。この部分、刷りひどく悪し。他書と使い回しのものか。

31）横山・小學作文獨稽古
中本活版1冊。黄色無地表紙。
題簽：子持ち枠付き短冊形白紙、「＜小學＞作文獨稽古　全」。
封面：黄紙、タテ3ツ割。中央に「＜小學＞作文獨稽古全」、右に横山栞著」、左に「東京　薫志堂藏」。（刷り悪し）。題辞があって次に目録。
小學作文獨稽古目録　季之部：年始の文　四章、新年の復書　～歳末の文四章、仝回辭、雑之部：出立報知の文　四章、仝復書～友人の怠惰を戒むる文、仝返書、賀之部：入學を祝する文、及第を賀する文～壽莚招人文、同復

辭、以上　通計七十二題百二十七章」。
内題：小學作文獨稽古／横山栞著」。尾題：小學作文獨稽古終」。10行90頁。
柱刻：（魚尾）小學作文獨稽古　（ノンブル）」。
刊記：終丁ウ下段。「明治二十三年九月十日印刷、仝年九月十五日出版／＜版権所有＞／著作者』横山栞・芝區琴平町二番地、發行者　井上勝五郎・京橋區南紺屋町壹番地、印刷者　瀧川三代太郎・日本橋區新和泉町一番地」。
頭書：字類イロハ頒」。周年（いちねん）。田舎（いなか）。～枢機（すうき）セイジドウグ、筋道（すじみち）」。字類イロハ頒畢」。標題末に「頒」を付すのは珍しい。わかつ、わけ（分、別）の意味で付けたのであろうか？　2字熟語が中心であるが、一字のもの、一週間（いつしうかん）、無花果（いちじく）、金満家（きんまんか）、目覚敷（めさましく）、停車場（すていしよん）のような3字のものも含む。また、姦吏（かんり）ワルキヤクニン、喔咿（あくい）ヲフワラヒ、民情（みんじやう）タミノコヽロモチのように、見出し語の左傍にカタカナで意味説明や別訓を付している例もある。
用文は他の同類の書にあるものと同趣向で新しみに欠けるが、定番の「友人の怠惰を戒むる文」とそれに対する返書の遣り取り：「貴兄事、道路の風評には、近頃酒色に惑溺し、従来御勉勵の勤學も水泡に属し候義にて、御両親にも深く御心配の由傳承」云々に対する、「小生事は御存の通り愚鈍なる性質に候え共、花街柳巷抔に耽溺候儀ハ誓つて無之、全く無根の風評に有之候間、必御心配被下間敷候」「御忠告の段は骨肉に徹し難有奉存候」の応答は他書にもしばしば見られる遣り取りであるが、真面目なもので、揶揄すべきものではないが、いつ見ても微苦笑を禁じ得ない。

32）間瀬秀三・＜漢語字類＞作文獨稽古
中本銅版1冊、入れ紙本。　表紙：赤色布目地紙に輪違い模様空押し。題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜漢語字類＞作文獨稽古　間瀬秀三編　全」。封面：白紙に緑色刷り。匡郭をタテに3ツ割り。中央に大きく書名。右に「雲外居士編」、左に「東京　開文堂發兌」。
緒言：明治廿四天中秋　編者誌」。内題：＜漢語字類＞作文獨稽古／東京　雲外居士編。柱刻：上部に「作文獨稽古」、魚尾を置いて下方にノンブル。有界10行、52頁。尾題：頭書とも題名の末に「終」を付す。

刊記：後ろ見返し。「明治廿四年十月十五日印刷、仝年十月十五日出版」、＜版權所有＞／編者　東京市本所區元町拾番地・間瀬秀三、＜印刷兼発行者＞仝市本所區松井町三丁目拾番地・吉澤富太郎／＜東京大賣捌＞／本石町・上田屋、通油町・藤慶、淺草三好町・大川屋、新大阪町・鶴喜／通四町目・金櫻堂、両國若松町・三友、大傳馬町・椙本、南傳馬町・目黒／南槙町・青野、淺草仲見世・本利、小傳馬町・近園、淺草茅町・松成堂」とある。売捌所の書肆を略称・通称で出しているのは珍しいケースである。

本文は「新年を賀する文」～「忘年會を催す文」「同復」「議會傍聴券所望之文」までの89通。洋服裁縫注文之文、江島行を約する文、洋鶏飼養問合之文、幼稺園設置協議之文、運動會打合之文、新聞縦覧所設置之文等が目を惹く。はじめの文（往）は草書体、それに応える文（復）は楷書体で書かれている。実務的な往復書簡文が多いこともあって、分かり易さと共に真草の表記の学習も考えての工夫であろう。

頭書は「＜いろは分＞漢語字類＞」。有界11行2段に、い之部：意見（イケン）ミコメ、意匠（イセウ）クフウ、異議（イギ）カハリシミコミ～す之部：寸志（スンシ）コヽロバカリ、樞要（スウエウ）カンエウ、瑞祉（ズイシ）メデタシと意味説明も付し、本文に合わせた銅版画12コマをさし挟む。(註4)

33）伊澤駒吉・＜新體普通＞用文獨稽古

A）中本活版1冊　表紙：栗梅色布目地紙。題簽：二重枠付き短冊形白紙、「＜新體普通＞用文獨稽古　全」。

封面：桃色紙、飾り枠タテ3ツ割り。中央に大きく書名、右に「伊澤孝雄編輯」、左に「＜作文類句／自由自在＞此村欽英堂」とあり。凡例：明治廿八年一月編者識。

目録：四季之部、日用書牘之部、電信文例、諸證文例、鼇頭目録の5つに分けて掲載。書牘は174通、電信は13例、證文は9通の総計196通。鼇頭目録は時候の事、端作の事～追啓の事の9項と、文章成語類句。

　徴兵應募の人へ送る文、豫備召集の兵士に送る文、出発前營中より自宅へ送る文、一兵卒當時の氣概を自宅へ申遣す文など、標題から日清戦争の影響

を感じさせるものも相当あるのではと思ったが、それ程ではない。蓮見に友を誘ふ文、博覽會縱覧誘引の文、無沙汰を謝する文、友人の洋行するに寄する文、快気祝に人を招く文、落雷見舞の文、開店を賀する文、東京見物に誘ふ文等はよく見かける文例であるが、災害の見舞文のうち海嘯（つなみ）見舞は珍しい部類である。

柱刻：新體普通（魚尾）用文獨稽古（ノンブル）欽英堂發行」。

本文10行。12＋110頁。

頭書の「文章成語類句」はイロハ順。（意）意外に御無音に打過、甚不得其意、御意見承度候、意志～（推）推參可致候、推考致候處、御推擧被下。

刊記：後ろ見返し。明治廿八年一月三十一日印刷、仝年二月四日發行、仝年三月五日再版、仝年三月十五日三版、仝年四月廿二日四版、仝年六月三十日五版、明治廿九年一月五日六版、仝年三月十八日七版」と出版経緯を列記し、左に＜版權所有＞／著作兼發行者　大阪市南區鹽町通四丁目百七十五番邸・伊澤駒吉、發行者　大阪市南區順慶町通四丁目百七十九番邸・此村庄助、印刷者　大阪市西區立賣堀北通壹丁目三十九番邸・矢野松之助、專賣所　大阪市心齋橋通順慶町北へ入・此村欽英堂」とある。

冒頭頁のノンブルや奥付の矢野の住所に誤植あり。著者伊澤（1851－1917）は、小学唱歌や音楽取調所関係で知られる人物であるが、教育、政治など多方面で活動している。本書の例文は言わば定番のものであり、その片鱗は窺えない。

B）同明治33年改正増補版

肉桂色地紙に亀甲菱模様空押し表紙。題簽Aに同じ。封面：桃色紙、Aと同様式だが、左欄の書肆名の個所が「浪華書房　此村欽英堂藏」となる。「凡例」の年記も「明治三十二年四月」となる。

Aの改版。本文9行の内容はAに同じ。10＋126頁＋奥付。

刊記：年記のうち七版まではAに同じ。その後に明治卅一年一月廿五日八版、明治卅二年五月廿日改正増補九版、明治卅三年三月一日拾版」と追加

し、下に「訂正増補／用文獨稽古」と書名を記し、左上に＜版權所有＞、その下に著作兼發行者　大阪市南區鹽町通四丁目百七十五番邸・伊澤駒吉、發行者　大阪市南區順慶町四丁目百七十九番邸・此村庄助、印刷者　大阪市南區鱧谷東之町百七十五番屋敷・周擴合資會社支店　前田菊松、專賣所　大阪市心齋橋通順慶町北へ入・此村欽英堂」と列記する。

鼇頭（頭書）は、Aのイロハ分けの文章成語類句の後に、郵便差出し方心得、電信規則摘要（明治32年3月1日改正）、印紙税法（明治32年3月9日法律第54號）の3項を新たに追加している。

Ⅳ

次は「獨案内（ひとりあんない）」、「獨學（ひとりまなび）」、「早學（はやまなび）」、それに「自在」である。

34）鈴木政雄・＜頭書熟語＞作文獨案内

中本　活版･鉛版混淆　1冊

深緑色布目地表紙。題簽：＜頭書熟語＞作文獨案内　全」。

封面：赤紙、匡郭タテ3ツ割り。中央に大きく書名、右に「鈴木政雄編纂」、左に「大阪　田中宋榮堂發兌」。

自序：明治二十八年初春　編者誌」。

目次：年始の文、同返書～帰郷報知の文、徴兵に應ずる人に送る文　56通

最後に「徴兵に應ずる人に」云々の一文が入っているが、文中に「今日は日清兵を交るの際」「今ヤ清國ト事アルノ日ニ於テオヤ」とあり、明らかに日清戦争に関連し後から急遽付加したものと思われる。往復とも、始めが草書・平仮名、後が楷書・カタカナで記されているのは、あるいは31）間瀬のそれにヒントを得てのことか。

柱刻：頭書熟語（魚尾）作文獨案内（ノンブル）」。本文9行、3＋76頁。

刊記：最終76頁に、「明治二十八年二月廿八日印刷、同二十八年三月五日發行／＜版権所有＞／編纂者　鈴木政雄・大阪市西區新町通三丁目三十番屋敷、發行者　田中太右衛門・同南區安堂寺橋通四丁目二百四十二番屋敷、賣捌者　大塚宇三郎・同南區心斎橋筋二丁目二十四番屋敷、印刷者　都村善

平・同東區上難波南之町六十六番屋敷」とあり。
「頭書熟語」は2字熟語。一層(イツソウ)ヒトキワダチ～水程(テイ)ミヅノウヘノミチ。活版13行2段。1,849頁。

35）津田南濤・＜學生必携＞用文獨案内
A5判、活版鉛版混交、洋装入れ紙本1冊。
表紙：厳島神社・富士山遠望、男女児童隊列等彩色絵入、書名・編者（津田南濤編）・発行元等刷り込み。見返し橙色。
凡例：（明治廿九年二月　編者識）一、本書は専ら日用往復文を學ばんとするものの為に著せり…、一、上欄には熟語を類聚して伊呂波別とし、一目捜索の便に供せり、一、中欄には、往復文に必要なる類語を蒐め、以て作文練習の一助となし、博く佳語を知得せしむるに勉めり、其他民間必要缺くへからさる願届書式、諸證文例、電信文案等を掲け、應用の便に資せり」として、次頁以下に「＜學生必携＞用文獨案内目録」を載せる。
　○口上書類：出産を賀す、同返事～忘年會を催す、同返事　50
　○日用書類：年賀状、同返事～帰郷に付人を招く文、同返事　63
　○中欄目録：下欄本文の類語　出産～冬　6、願届書類書式　開業届～盗難届　15
　○諸証書　金子借用証書～委任状　7　　計135通。
内題：＜學生必携＞用文獨案内／岡本鼎峰編」。　本文：10行　行草体。
刊記：明治二十九年三月一日印刷、仝年三月十日發行、＜正價金　銭＞、＜版檜權所有＞、著者　津田南濤、發行者　東京市日本橋區若松町廿一番地・榊原友吉、印刷者　同日本橋區堀江町三丁目拾番地・大嶋寛治」。
＊表紙、奥付は津田編だが内題脇には「岡本鼎峰編」とある。刊記上部と左脇に広告「榊原文盛堂發行書」があり、川田剛吉・明治文證大全、堀中東洲・用文一萬題等19点を挙げる。

頭書「熟語」は活版イロハ引、一定、一端～素姓、棄児。総計1,454項。2字熟語が中心だが、明治期の早引節用集等にも載る因循姑息、水上警察、樞密

顧問官なども散見される。なお、ケ之部に今朝（コンテウ）、今日（コンニチ）の2項が混入してしまっている。

＊本の体裁は頭書、中欄、下段の本文を併せて、所謂三階本形式になっている。

36）岡本三山・＜學生必携＞作文獨案内

A5判　活版・鉛版混淆　洋装入れ紙本1冊

表紙：色刷り、男女児童の野外ベンチでの学習の様子、洋風封筒、梅花、小鳥等の図。「＜學生必携＞作文獨案内」の書名、「岡本三山編纂、東京書肆・榊原文盛堂發行」の記述あり。見返し：35と同じ橙色。

凡例：明治廿九年三月　編者識」。

巻頭の「＜學生必携＞作文獨案内目録」によれば、〔上欄〕は、祝賀之部、吊慰及び見舞之部、招聘之部、誘引之部、謝禮之部、寄贈之部、依頼之部、通知之部、照會之部の9部に分け、計49、日用書類が祝賀、吊慰及見舞、招聘、謝礼、寄贈、依頼、通知、照會の8部25、中欄が、學者～娼妓、器具物品、一筆啓上之類～尚々の類、假名交り文、和文、名家の書簡、上欄目次が異名。

34と同体裁、三階本。

作例は鉛版行草体10行。「演説會傍聴に誘ふ文」、「同返事」を除くと、時代を映すものは少なく、全般的に平板。また、料紙が藁半紙風で造本が安手なこともあって、表紙絵は美しさに欠ける。（←今日の広告宣伝にしばしば見る断り書きを借りれば、「個人の感想です」ということになる）。

刊記：後ろ見返し、35と同様式で、上と左横にある広告は全く同じ。異なるのは刊記のうちの年記：明治二十九年三月廿日印刷、仝年三月廿六日發行の日付部分のみ35のそれを削り新たに入れ替えたものである。「正價」の部分も肝心の値段が空白のまま。著者も津田から「岡本三山」に変えただけである。

37）江東散史（江東敬夫）・＜新選普通＞帝國作文案内

半紙本　活版・鉛版混淆　入れ紙本1冊

表紙：鮮緑色無地紙。

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙、「＜新選普通＞帝國作文案内　江東散史編纂全」。

封面：橙色、匡郭タテ3ツ割。中央に大きく書名、右に「江東散史編纂　＜千里眉目＞、左に「東京　共愛書屋發兌」。

緒言：明治廿八年十月　編者誌」。

＊3階本。〔上欄〕いろは引類語、〔中欄〕記事論説文例、〔下欄〕本文。記事論説は、春郊遊歩ノ記～不倒翁説。活版、楷書体漢字に片カナ。　23。

内題：＜新選普通＞帝國作文案内／江東散史編」。

柱刻：下部にノンブルのみ。4＋60頁＋奥。

刊記：後ろ見返し。明治二十八年十月十日印刷、仝年仝月廿日發行／＜版權所有＞／編輯者　江東敬夫、發行者　東京市本所區松井町三丁目十番地・吉澤富太郎、發賣者　仝　仝區松井町三丁目九番地・林甲子太郎、印刷者　仝　日本橋區新和泉町二番地・山本新吉」。

本文：新年を賀する文、同復書、新年宴會を催す文、同復書～田植手傳を頼む文、同復書、茶摘に人を頼む文　同復書の計68、末に「用文終」とある。鉛版振り仮名つき行草体10行。4番目に「金鵄章拝受の人を賀す文」があるが、これは文中に「賢兄、征清之役、旅順口大激戦に於て、抜群の勲功を揚られ候廉を以て、今般金鵄章拝領被遊候趣き、千秋萬歳不磨之一大御名誉と、謹で奉恭賀候」とある。「徴兵合格を賀す文」とともに、日清戦争を踏まえての用文である。

電信文例11、末に「電信用文終」とあり、諸願届証書文例18。

頭書「いろは引類語」は意外、意味、意見～寸陰、數面（スクワイ）（まま）反復（ハンフク）、趨謝（スウシヤ）可致（イタスベク）。「頭書用語終」とある。2字熟語が中心。眞暗闇、眞正面といった3字のものや、養生専一、天氣豫報、滅太無性、袖手傍觀（シウシユバウクワン）の如き4字熟字も混じる。

38）西森武城・＜日用書牘＞作文獨學

中本活版　入れ紙本1冊

表紙：薄黄色地紙に紗綾模様空押し。

題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜日用牘＞作文獨學　全」。

封面：匡郭内、タテ3ツ割り。中央に大きく書名・全」、右に「西森武城著＜版權所有之章＞」、左に「東京　金盛堂藏」。題辞があって次に目録。

目録によれば、春の部～冬の部、雑部。多くは返事を伴う。46通＋返事36、計82通。穏やかなものが殆ど。「寫眞を送る文」、「書籍目録の逓送を申し送る文」などが新しい所か。「書籍を借に遣す文」の対象物は「讀史餘論」。

内題：＜日用書牘＞作文獨學／西森武城著」、尾題：＜日用書牘＞作文獨學終」。

柱刻：下方にノンブルのみ。2＋94頁、10行。

刊記：終丁ウ。「明治廿六年一月卅一日印刷、明治廿六年二月三日出版／＜版權所有＞／編輯者　淺草區須賀町十九番地・西森武城、發行者　日本橋區堺町八番地・伊藤倉三、印刷者　日本橋區新和泉町一番地・瀧川三代太郎、發兌元　日本橋區堺町八番地・金盛堂」。

頭書「作文いろは分字類」は、威勢。威光。威張（いばる）～凉。健（すこやか）。水害。末に「作文いろは字類終」とある。有界10行2段が基本だが、魯敏遜（ろびんそん）。眞人間（まにんげん）。資本金のような3字熟字、一杯機嫌。万古不易。のような4字、同病相憐む。のような例も散見される。

また、「豫想外（よさうぐわい）」、「幼少（ようせう）」のように、左にカタカナで「オモヒノホカ」「コドモ」と意味説明に相当するものを付したりしている例もある。

39）堀本柵山人・＜有益活用＞帝國作文獨學

中本活版洋装1冊。表紙：薄水、薄黄、黒の3色刷り、書名等印刷。「＜頭書・作文いろは字引＞／（陰刻で）＜有益活用＞帝國作文獨學」、右に「堀本柵山人編輯」、左に「東京　盛花堂發行」とある。封面：桃色紙。凡例。

目録：新年を賀する文、同返事～友人怠惰を戒むる文、同返事、不養生なる

人につかハす文。11行60頁。柱刻：下方にノンブルのみ。部類分け等無し。〔諸証書文例〕手附金受取証～為取換。上下2段、27通。末に「＜有益活用＞帝國作文獨學終」と尾題あり。

刊記：終丁ウ匡郭内。「明治廿八年八月廿六日印刷、明治廿八年八月三十日發行／＜版權所有＞／＜編輯兼發行者＞　東京市淺草區左衛門町壹番地・岡村庄兵衛、印刷者　東京市神田區柳原河岸第十四號地（舊第拾壹號地）大場よく美、發賣所　東京市淺草區左衛門町壹番地・盛花堂、印刷所　東京市神田區柳原河岸第十四號地（舊第拾壹號地）・龍雲堂」。

頭書：＜作文＞いろは類語」。いの部：〇如何〇意見〇異存～すの部：…〇數度〇數多。2字熟字が中心だが、〇（ぬけめなく）抜目無、〇（ぬしや）塗師屋のような3字、〇臨機應變、〇類以友集のような4字のものも数語ある。計2,134語。読みのみで意味説明は無し。

40）松下照義・＜記事類語＞作文早學

中本　活版鉛版混淆　3階本1冊

薄紫表紙、題簽：子持ち枠付き短冊形白紙、「＜記事類語＞作文早學　全」。

封面：牙黄色、飾り枠タテ3ツ割り。中央に「＜新撰實用＞作文早學」と書名を大きく出し、右に「松下照義著」、左に「東京　求光閣發兌」と記す。

序：＜記事類語＞作文早學序」、明治甲午（＝27年）孟夏　編者識」。

目録：年始の文　四、仝答文　一、寒氣訪問文　二、仝　一、梅花贈る文　二、仝　一～死去を報知す文　一、仝答文　一、家督譲受を報知する文　一、仝　一、賀筵人を招く文　一、仝　一　83通。

年始の文は4通あるが、うち2つは短文で、「はがきに用ゆ」との指定がある。本文に「劇場見物に誘引之文」の文あり、「近頃流行の壮士輩の演劇は、通常の物とは異り、其容姿如何にも活潑にして目新しき活劇を演じ、真に観る者をして感動せしむ、誠に一奇観なる由に付」云々とあるは、実状を映したものとして興味深い。

記事：元旦ノ記、春年ノ記～歳末ノ記、某所ニ行軍ヲ観ノ記　24、論文：名誉ヲ論ス～言行一致論　7。

内題：＜記事類語＞作文早學／鳳鳴散史編輯」。下段が本文。中段が「記事文」、上段が「類語」。　尾題：作文早學終、記事論文畢、類語終。
柱刻：（魚尾）作文早學（ノンブル）」。84頁＋奥。

刊記：後ろ見返し匡郭内。「明治廿七年五月廿日印刷、明治廿七年五月廿三日發行／＜版權所有＞／著者　東京市麻布區我善坊町一番地·松下照義、發行者　仝日本橋區通三丁目拾三番地寄留・三井新次郎、發行者　仝京橋區本材木町三丁目廿番地・服部喜太郎、印刷者　日本橋區堀江町三丁目拾番地・堀越市太郎」。
頭書：「類語（いろは引）」は、いノ部：一層、一個、一應、一笑～すノ部…瑞雲、衰季、衰態。1,818項目。2字熟字のみ、12行2段。意味説明無し。
※ひどく無責任な錯簡あり、記事文や本文が続いていない個所が生じている等、かなり杜撰な編輯ぶりである。例えば頭書について言えば、63頁「江ノ部」の前に「こノ部」の標目ナシに6項が突如載り、65・66頁に標目と共に46項目がある。「てノ部」は64頁6行目以下に標目と共に12項あり、飛んで67頁1～ 7行目に14項目がある。また「ひノ部」は、76頁末10～ 12行目に標目と共に4項があり、81・82頁に48項目が載る。そして「すノ部」は、80頁は門標のみで、83・84頁に44項目がある。19頁3行目の「ねノ部」の門標は「ぬ」の誤植である（項目ナシ）。自序で「初學此鍼針ヲ以テ茫洋タル文海ヲ渉レ」などと臆面も無く宣っているが、実情はこと程左様にひどい体たらくである。一本しか見ていないので断言は出来ないが、こんなトンデモ本が平然と売り出されていたとは、アキレを通り越し怒りを覚える。

41）寺井與三郎・新選作文自在
半紙本　2巻1冊
表紙：黒布目地紙に波・千鳥空押し模様。
題簽：子持ち枠付き短冊形白紙。「＜日用便覽＞新選作文自在　寺井與三郎編輯」
封面：紅赤色紙、匡郭内をタテに3ツ割り。中央に書名を大きく出し、右に

「寺井與三郎編輯、小笠原香雨浄書」、左に「＜明治十二年七月新刻＞松雲堂梓」と記す。
目次：年始之文、同返翰、寒中見舞之文、同復書～病氣見舞之文、同返事、死去為知之文、喪を弔之文　54通。
頭書目次：雅俗簡端、四季時候～十二月之異名、時令雑詞、用文雑詞いろは部分　21項
諸證券書式：金子借用之證、金子預リ證券、預金証券～家屋敷質物證、雇人請状、雇人引取證　18通。諸證券書式了」。末に「＜日用便覧＞新選作文自在目次終」とあり。
内題：＜日用便覧＞新選作文自在巻上（巻下）／寺井與三郎編」。尾題：＜日用便覧＞新選作文自在巻上（巻下）終」。
柱刻：中黒口（魚尾）新選作文自在目録（巻之上、巻之下）（丁付）」。
丁付：（上）一～四、一～四十八、（下）一～四十四。
刊記：後ろ見返し匡郭内、「明治十二年五月廿八日出版御届、同年七月刻成、編輯者　大阪府平民　寺井與三郎・東區北渡邉町三十番地、出版人　同鹿田静七・東區安土町四丁目四十八番地」。

頭書：一・雅俗簡端」、二・四季時候」、三・年始簡端類語」、四・稱人之郷里」、五・自稱郷里」、六・稱人之居處」、七・我稱居處」、八・彌益之辨」、九・称人之安否」、十・我称安全」、十一・返翰端書」、十二・答示諭語」、十三・書翰結尾」、十四・猶尚之譯」、十五・追啓」、十六・書翰脇付」、十七・返翰脇付」、十八・人倫自他称呼」、十九・十二月之異名」、廿・時令雑詞」、廿一・用文雑詞いろは部分（わけ）」。

上記目録を見ても分かる通り、本書は書簡・書類に使用する語彙や形式についての指導に力を入れており、掲載された各例文の後にも「類語」として多くの語彙・フレーズを載せている。従って本書を活用すれば、（褒めすぎかもしれないが）語彙や文章力が身に付き、自由自在とまでは行かなくとも、作文を作成して行けるはずである。

頭書のうち巻之下5オ以下の廿一「用文雑詞」は、祝（イハヒ）、賀（イハフ）、厭（イトフ）、苛（イラツ）、僞（イツハル）に始まり、尖（スルドシ）、推量（スキリヨウ）、既（スデニ）、末（スエ）、住居（スマイ）に終わる。

V

さて、これまで目についた書簡・作文指導書を紹介して来たが、はじめにも述べた如く、この手の書冊は相当に多い。時代を明治末から大正・昭和まで下げれば、菊判・ハードカバー・厚冊の類似の指導・啓蒙書が色々と目につく。例えば鷲尾義直編・大町桂月監修「現代文章大鑑」（大正3年4月初版、11月14版）（附録「文章辭典」として、日用字彙、故事熟語解、美辭麗句集、誤字誤讀誤文正解、國語假名遣、字音假名遣、＜五十名家＞文章座右銘が付く）、安田稲洲・高木斐川編「＜實習資料＞文章総覧」（同5月）（附録「文章辭典」として、國文法摘要、送假名一覧、國語假名遣一覧、字音假名遣一覧、畳字便覧、類字便覧、類語便覧、類句便覧、書簡文用語、熟語便覧、漢詩、和歌、俳句、韻文、格言、俚諺が付く）、高木尚介著「書翰文作法及文範」（大正5年11月）（附録「作文辭典」として送假名法、類字例、同訓異字の漢字例、日用語彙、毛筆：行草体の手紙之文、日用字類あり）等多々ある。

然しながら、帝國實業學會藏版「＜最新＞日本書翰文大全」（明治43年1月初版、同45年4月4版）のように、いくら女子教育に力を入れ「日常に坐右の友として、其實用に便ならしめんが為め」と言っても、附録として和洋料理法が入り、味噌汁のつくり方、あげ豆腐、栗ぜんざい、ライスカレー、コロッケ、ドーナツツの作り方まで載せているのは書翰文作法書として如何なものか？

さて、今回の拙稿の最後に42）として袖珍本、中川柳涯「軍人用文（ぐんじんようぶん）」（明治38年2月）1冊を挙げておく。本書は日露戦争の勝利を背景に出されたもので、表紙からして旭日旗と錨。弾丸を模した枠内に「＜陸海＞軍人用文」の書名、右方に「中川柳涯著」とある。携行を慮ってタテ7．2、ヨコ5、3cmの極小本に仕立ててある。内容は勿論軍事関係：祝賀文9、慰問文5、報信文

11、依頼文5、謝禮文5、照會文6、見舞文8の計49通。末に「軍人用文終」とある。

刊記：明治三十八年二月十八日、明治三十八年二月廿三日（軍人用文奥付）／＜著作權所有＞／著作者　中川柳涯、發行者　關由藏・東京市下谷區仲徒町一丁目六番地、發行兼印刷者　山崎暁三郎・東京市淺草區新福井町一番地」。

頭書は「熟語」でイロハ順。慰問（いもん）・なぐさめる、偉功（ゐこう）・おほてがら、偉観（ゐくわん）・りつぱなみもの、異域（いき）・ぐわいこく～垂憐（すゐれん）・あはれみをたれる、頗（すこぶ）る・たいそう、數多（すうた）・たくさん、炊事（すゐじ）・めしたき、合計338項目。次に金言集、安否詞、欣喜詞、接續詞が続く。(註5)

（註1）因みに明治期のものには、書名に「明治」を取り込むものが多い。、例えば、後藤常太郎（内題横には「加藤伴之編」とあり）「＜新撰活版＞明治いろは字典（明治30年3月）がそれであり、大正では加藤伴之「＜大正＞いろは字典」（大正11年8月）、昭和では「＜昭和＞いろは字典」（昭和3年5月）ということになる。江戸期でも「＜宝暦新撰＞早引節用集」や「＜明和新撰＞廣益好文節用集」「＜安永新刻＞拾玉節用集」「＜天保新刻＞早字節用集」といった、書名の角書きに年号を含むものが散見されるが、書名そのものに年号が入り込んでいるものとしては、（イ）「寶暦節用字海藏（ほうりやくせつようじかいぞう）」と（ロ）「嘉永早引節用集（かえいはやびきせつようしう）」を挙げることが出来る。

前者（イ）は大本1冊、柱刻「寶暦節用通宝藏」。浪華絢藻齋挨庭の編書、藤江四郎兵衛雕刻、寶暦六（1756）年子十一月吉旦、浪花書林・鳥飼市兵衛、松村九兵衛、大野木市兵衛、渋川清右衛門、鳴井茂兵衛の刊。2行両点、20＋160丁＋奥付。見返しから前付第1丁オモテに架けて大きく目録題「和漢節用萬寶圖會」がある。

それによると、「巻首之目録」として「二十四氣七十二候之事」「四教繪抄」「四民繪解」「躾方仕用集」、「改算塵劫記」「楊弓射禮並図」「男女之相生」「有卦無卦之事」「十二月異名」等28項目、「頭書之目録」として、「書翰用文章」「御公家鑑」「大名武鑑」「日本武将傳記」「武具の圖」「歌の讀方指南」「俳諧指南句法」「茶湯指南」「囲碁作リ物」「咒咀重寶記」「妙薬重寶記」「手の筋占事」「人相見様の叉」「本朝古今物の始リ」「四躰伊呂波」「七夕の詩歌」「和朝制作の文字」「分毫字」「篇冠盡」「食物喰合」「料理重寶記」「料理献立」「年代之繪抄」「年鑑六十圖」「刀之銘盡」「名乗字」等64項を出し、「已上目録畢」とする。これらの附録92項は、この期のこのての節用集に普通に見られるものであり、部門分けも乾

坤、時候～数量、言語に至る通常の13門。何の変哲も無いようであるが、「一字を先へ出し、二字三字次第に連續す、用務の字を始に書し、遠く用事すくなき字を二行に書く、＜世に行ハるゝ節用のことく、増字にハあらず＞、字を求るに速ならしめんと欲して也、而じて字をます事ハ十万有餘字、多和漢三才圖會にて撰集む、名所のごときは秋の寝覚による、言語は以呂波韵に出、頭書會玉篇によりて訂正をなす」とする「凡例」の記述は注目に値する。

すなわち「一字を先へ出し、二字三字次第に連續す」というところは、本書の4年前の宝暦2年初冬に初版が出、部門分けを廃し字数によって引くことによって、早く引けるという点で、これまでの検索法に大きな衝撃を与えた「＜宝暦新撰＞早引節用集」に影響を受けてのことであると思われるからである。また、次に名前が挙がっている4書は、決して珍書や稀書では無い。正徳2年自叙、同5年追加跋刊の105巻81冊からなる大百科「和漢三才圖會」にしても、江戸初期以降連綿と開版されて来た「以呂波韻」（本書に近い頃のもので言えば享保5年仲夏刊の「改正新廣増益以呂波雑韻」＜外題：群玉以呂波韻大成＞や同19年3月の袖珍本「増補以呂波韻」アリ）、簡便な歌枕書として長く利用された元録5年正月初刊・有賀長伯の「歌枕秋の寝覚」（正徳4年増補版アリ）、そして元禄4年12月凡例、同5年12月の初刊で、享保20年初冬版があり、版刷を重ねて明治期まで漢和辞典の代表格として大いに利用されて行く毛利貞斎の「増續大廣益會玉篇大全」12巻12冊にしても、当時通行していた普通本であった。したがってそれらを参考に校訂を加えたというのも、当然の作業であったと言えるからである。

さらに続けて「凡例」は言う：「三書賈＜澁川・柰村・鳥飼＞嚮に彫刻の節用数版＜万字、立新、大海、廣太、萬圖、萬国、篆字、大極等也＞、ことごとく取用ゆ、全く他家の書をからず、全備をなして、日用の事毎、いさゝかもるゝ事なきがごとし、大幸といふべきのみ」と。

三書賈とは澁川清右衛門、柰村九兵衛、鳥飼市兵衛：いずれも当時大坂の大手書肆。とくに鳥飼は、この後、編輯・企画も盛んにして行く出版業者であった。そして略称で挙げている節用数版とは、「万字」は現物を確認できなかったが、「立新」以下は、宝永7＜1710＞年刊「立新節用和國宝蔵」（享保2年版等アリ）、同年刊「大海節用和國宝蔵」（享保9年版アリ）、享保14＜1729＞年刊「廣大節用字林大成」、同12年「萬圖節用福字通便」、寛保2＜1742＞年刊「萬国通用要字選」、延享2＜1745＞年刊「篆字節用千金宝」、享保・宝暦頃刊「大極節用国家鼎宝三行綱目」（＝元録3年跋刊、正徳3年版アリの「＜真草古文両點＞頭書大益節用集綱目」の改題本）である。これらを総合的に参看し取り込んだというのが本当ならば、本書は実に立派な節用ということになる。自己宣伝もここまで来ると大変なものである。

後者（ロ）「嘉永早引節用集」は半紙本三つ切りの横本で、薄花色無地表紙。題簽「早引節用集　全」、封面「安政早引節用集」、内題「嘉永早引節用集」。有界9行6字詰め。柱刻は「早引　○（丁付）」。1＋117丁＋奥付。本文は「い一」伊．意．位．猪．膽．～「す五」…素浪人．末方「す六」杉障子．水仙花。丁付百十

六オモテまで本文。以下「男女相性名頭字」、〔十二支〕の附録2種が付く。架蔵本の刊記は、後ろ見返しに「安政二年卯正月／＜東都＞／山口屋藤兵衛、藤岡屋慶次郎、泉屋市兵衛、山城屋平助、吉田屋文三郎、森屋治兵衛板」とある。この6書肆記載の個所は字体等の不整合甚だしく、明らかに後印本であることを示している。山田リスト（＜開版＞節用集＜分類＞目録・昭和36年5月）に載る同氏蔵の山口屋茂兵衛～山城屋平助6名本が初印本であろう。巻頭「文字引様」の前に、「今この早引節用集ハ音訓の誤りを訂し、専當用の文字のみ輯たれバ、座右におきて重宝此上なし」と言っているが、項目数は6,735。増補改正の11,722、増字百倍の13,008等と比べて半数足らず。最高最適のものと言えるか否かは微妙である。

なお、往来物と附録の語彙集というテーマから少し外れるが、あと1、2点ほど挙げる。一は「武道節用集（ぶだうせつようしう）」。これは延宝9（1681）年刊「武家節用集」の改題・増訂版で、正徳元（1711）年頃刊の「万年節用集大成（まんねんせつようしうたいせい）」の頭書に掲載されている。言わば節用集の上に節用集があるといった態のものであるが、以前「＜武家節用＞和漢武用類編」－改題・改編本の世界－として「平成18年度極東証券寄附講座・古文書の世界」（平成19年9月慶應義塾大学文学部）で紹介したので、詳細は省略する。

もう一つは「字貫節用集」美濃二ツ切横本１冊。上段に「増補畫引玉篇」、下段に「＜増補（ぞうほ）＞字貫節用集（じくわんせつようしふ）」を配するという構成。寛政8（1796）年9月版と文化3（1806）年12月版があり、後者には文海堂（＝大坂・松村＝敦賀屋九兵衛）の広告：藏板豫顕目録が付いたものもある。大空社「節用集大系」に影印がある。

この手のもの：異なる辞書・字典を一書としてまとめて売りに出すということは、明治期にもしばしばある。曰く二書合本、三書合本、五書合本等と称する一群がそれである。究極には「＜新撰活用＞十書字典」と称するものもある。これは袖珍銅版2冊本で、青木輔清の著作①「＜補訂＞校刻小字典」～⑤「新撰助字通解」5点と、藤堂卓の⑥「日本地名字典」～⑩「故事熟語字典」の5点をあわせたもので、明治33年1月大阪・東京青木嵩山堂刊。奥付の編輯者名が藤堂になっているものと、「再版」の文字を付け著者名が青木になっているものとの二版がある。（拙稿「明治期の辞書・事典―青木輔清の著作の中から―」平成17年12月「三田商学研究」48巻5号）

また、江戸のものであるが、「＜頭書繪鈔＞大廣益節用集（たいくわうゑきせつようしふ）＜真草両點＞」大本1冊の存在も忘れてはならない。これは節用集の頭書に「増補倭玉篇」を据えるもので、刊記に「元禄六歳癸酉季春良辰開板／書肆　江戸日本橋青物町・萬屋清兵衛、大坂梶木町・伊丹屋太郎右衛門」とある。封面＋116丁＋奥付。101ウで節用集本文が終り、113ウに「増補和玉篇終」の尾題がある。節用集は有界8行、乾坤、時候～数量、言語の13門、2行両点。頭書（中段）に絵入りの語注があり、

倭玉篇と併せて所謂三階本形式になっている。封面：下段に「塩時指引之操様」があり、上段に「集撰篇部之目録」という見慣れない名称の目録がある。それによれば「廣益節用集　真草・両假名、増字三千七百餘字」、「同註釈頭書　中段・頭書」、「増補和玉篇　上段頭書、新編・畫引」、「長暦便覧　中段・頭書、大小節付、年中今ヨリ廿年」、「名乗字頭　凡八百三拾八字、古文字五姓韻附」、「三國五山之沙汰　天竺・震旦・本朝三ケ所」、「日本諸國　郡名、東西南北、名物土産、知行高・田数之註」、「公家衆之次第　摂家・清花・名家・新家」、「日本之絵圖」、「内裏之絵圖　御殿之次第、間数絵所之註」、「古今略年代紀」、「二十四節、漏刻長短」、「服忌令」とある。（本書については「増補倭玉篇」との関連で取上げた菊田紀郎氏の御論考がある（「続中世・近世辞書論考」平成20年6月所収）が、刊行年を元禄9年頃としておられる。また別に元禄6年頃としている向きもおられるので、原本に基づきやや詳しく紹介した次第である。）

ところで「鼇頭節玉用篇」という風変わりな外題を有する元禄6年頃刊の一書がある。実見出来たのは下冊のみなので、その後印本を参考にしつつ紹介を行ないたい。栗皮色表紙、大本1冊。題簽は陰刻で「鼇頭節玉用篇＜増補圖繪＞、脇題簽に「諺解＜坤＞大全」とある。刊記は「藪田開板」とのみあり、住所等を削ったとおぼしき痕跡が上方にある。本文は「く・乾坤」：九品浄土。鞍馬。」に始まり、「す・言語」：耨、耕」、京師九陌横竪小路、数字（壱～拾）で終る。そして、名乗字、〔諸國郡付〕、五山之沙汰、分毫字様の4種の附録が続く。柱刻は白口、下方に丁付のみ。丁付：五十四～九十九、百又十、百十一～百十九、百二十又三十、百三十一、百三十二、百卅～百四十一。本文は丁付百三十二ウまで、刷りは良い。下冊には内題が無いので、条件に合うものを探すと、B「頭書増補節用集大全」が見つかる。残念ながら手許のBも改装の不完全本であるが、前付けの付録・天神七代、地神五代、人皇・一神武天皇に始り「百十四今上皇帝（＝東山）元禄」と続く歴代天皇一覧の末に「〇神武天皇即位元年ヨリ元禄六歳マテ二千三百五十三歳」、「〇孔子誕生ヨリ元禄六歳マテ二千百七十二歳」等とあり、元禄6年頃の編輯刊行であることが判る。そして、附録は別として下冊相当部分と比べてみると、本文・頭書とも字詰めが全く同一で、本書はA「鼇頭節玉用篇」の後印修逓本であることが、以下のような特徴によっても証される。（因みに頼朝から始まる「中興武將傳」は卅六・綱吉マデ、「家光公二男」とあり）。

①節用集はその成立に当たって「下学集」を下敷きにしているが、本書の頭書にある語注「僧都」や「無恙」、「冨士、不盡」、「兒手柏」にも「下学集」が引かれている。72ウ「穴賢」もそうで、末に「下学集につまびらかなり」とある。ところがその見出し「穴賢」の「賢」がA「鼇頭節玉用篇」では誤刻で「腎」となってしまっている。本書B「頭書増補節用集大全」も同様である。

②丁付百十七ウ4行目は「も」言語門の末であり基、嫌で終わっており、1行置いて丁が替わり次丁は「せ」乾坤門仙洞、仙家と始るのであるが、その「せ」2

行目の途中から入るべき背戸（せど）。前栽（せんさい）。～切所（せつしょ）。関（せき）の9項が、本来なら空いたままになっているはずの前の丁の最終行5行目に入り込んでいるのである。頁数の節減のために、近現代の国語辞典等で、前行の空きスペースに追い込みで入れるといった手段を採っている場合があるが、言わばそれと同じ手法である。貞享・元禄頃に盛んに刊行された二行両点様式の節用集の相互関係は複雑なものがあるが、この例に関してもBはAを踏襲しているのである。

③山田リスト70「頭書増補節用集綱目＜二行両点＞」（刊年記載ナシ）の注記にもあるが、本書の一大特色は、本文2行のうち左の楷書体の付訓が左右にあり、右はひら仮名、左はカタカナ、そのカタカナ部分がまた2行になっていることが多く、平仮名部分にカタカナで記されている例も散見される。言わば漢字に対する注記が多いということで、節用の他に玉篇の要素を含むという点から「節玉用篇」と命名したのではあるまいか。記して後考を俟ちたい。

（註2）寛政12年版は、題簽表紙中央、「＜通達仕用＞書状大全」。題名の右脇に「五節句并ニ月異名」、左脇に「文章上中下書替」とある。「＜通達仕用＞書状大全凡例」に、四季の部、祝儀の部、商人（あきうど）要用之部、混雑の部として簡単な内容説明があり、末に「凡例終」とある。続く「文章目録」によれば、四季之部は24、祝儀之部は30、商人要用之部は20、混雑之部は29の計103通を載せ、文章上中下書替、月異名并五節句異名があるが、実際には十干、十二支も付いている。丁付百七終のウに「右一帖者書肆鳥飼氏依懇望染愚筆者也／玄泉堂戸田榮治」の識語がある。巻末広告は「初學教訓草」以下「急用間合即座引」「国宝節用新増大全」「錦嚢智術全書」「博物筌」「大全正字通」「月令博物筌」等34点。末に「寛政十二年庚申六月發行／心齊橋南江四丁目・吉文字屋市左衛門」とある。

文化2年再版本は寛政12年版の偽似かぶせ彫り。題簽：表紙中央、寛政版と同様式。封面：飾り枠内に「書状大全」の書名を出し、文章上中下次第、月々の異名、書状法式并ニ圖とするが、実際には書状法式・圖は無く、十干・十二支がある。広告は「月令博物筌」と「大全正字通」の詳細な案内を含め17点、刷りが極美。刊記は「文化二年乙丑五月再板／大坂心齋橋通南へ四丁目・吉文字屋市左衛門」。1＋5＋112＋4丁半。袋があり、褪色洒落柿色刷り。太枠内をタテ3ツ割り。中央に大きく書名、右に「戸田玄泉堂筆」、左に「〇附録・文章上中下次第・手帋法式・月之異名」と掛札風に出し、左上に＜文化二年乙丑再版＞、下に「浪花書舗吉文字屋／定榮堂精造訂本」と記し右上方に魁星印を捺す。両本とも巻末に字引は無し。

（註3）高田任康編著「日本初！！漢ぺき君方式だから一度で引ける　あれば便利だ誰もがほしい　ありそうでなかった　読めそうで読めない漢字辞典」第一版（2001年1月　発売元・毎日新聞社、発行元・サンルイ・ワードバンク）、山田博、高田任康編「＜漢ぺき君で引く　サンルイ・ワードバンク＞現代漢字辞典」第一版（2006年10月サンルイ・ワードバンク）。

（註4）7頁の㊂新年宴會之文の挿絵の床の間の掛け軸に「開文堂版」の字が読み取れる。江戸期の草紙や浮世絵等にも、作中に自家宣伝をしている例がしばしばある。このケースもそれで、近現代につながる広告宣伝の一手法である。

（註5）今回の拙稿で、30、33、34、37、42と、たまたま日清・日露戦争の影響が認められる文献に触れることになったが、この手合いのものは色々ある。例えば「＜軍事摘要＞軍人文範」（明治28年11月初版、32年11月5版・陸軍大臣御認可尚武會編）、「＜戦時＞弔祭慰問文教範」（明治37年12月・大畑裕著）、「＜戦時＞續弔祭慰問文教範」（同38年6月・同）、「＜戦時＞送迎祝文演説教範」（同38年4月・同）、時代を下げれば「＜出征兵士に贈る＞赤誠の慰問文－陣中便り－」（昭和14年6月・帝國通信協會編）、「＜出征・入営・凱旋＞女子慰問文　附式辞挨拶演説　非常時體制版」（昭和15年3月初版、17年3月5版・篠原豊著）、「大東亜戰慰問手紙文」（同17年6月・留守信綱著）など。現在とてもひどい侵略戦争が行われているが、前回の大戦時に生を受け、軍医による乱暴な外科的治療のため右脚に影響が残り、今や歩行困難に陥りつつある小生にとって身に沁むものである。今後この種の著作が出て行くことにならぬよう切に願う次第である。